

2020年11月2日

プレスリリース



関係各位

2020年11月2日 開局記念式 会長・社長 挨拶

東京メトロポリタンテレビジョン株式会社(TOKYO MX 東京都千代田区)は、11月1日に開局25周年を迎えました。本日開局記念式で、代表取締役会長・後藤亘、代表取締役社長・伊達寛が、社員に向けてそれぞれ次のように挨拶しました。

なお、今年の式典は新型コロナウイルス感染予防のため、役員と社員表彰の受賞者のみが会場に集い、その他の社員はライブストリーミングによる参加となりました。

また、式典の後には、社員向けに同じくライブストリーミングで田村淳さんによる開局25周年の特別記念講演「開局 25 周年へ寄せて、将来の『テレビ』について」を行いました。

【挨拶】後藤 亘 代表取締役会長

「日本の文化価値の在り方を見直し、新しい放送の概念を」

当社は開局25周年を迎えました。当社の歴史を振り返ると、1995年の開局は日本経済が最悪の時期でのスタートであり、当社も厳しい状況が続きました。私は1997年に建て直しを依頼され、社長として就任しました。

当社は、鈴木都知事の時代に「東京都民のために東京都の情報を伝えるテレビ局が必要だ」との強い要望があり、その後、東京商工会議所が出資社のとりまとめを行い設立されたテレビ局です。初めの10年はアンテナ普及問題等で大変苦労したので、実質はその後の15年の積み重ねで現在に至ります。

当時、私は「地上波のデジタル化」によってアンテナ問題を含み、すべての受信機の問題が解決して、純粹にメディアとしてのコンテンツビジネスで勝負ができるようになり、再生する時が来ると考えていました。その後、2006年から地上デジタル放送に切り替わり、当社もキー局と同時にデジタル化しました。また同時に実行した東京スカイツリーへの移転で、放送エリア内の受信環境問題はほとんどが解決しました。本社もテレコムセンターから半蔵門に移転し、今日まで、皆さんと一緒に努力を重ねてきました。

2025年には新しい技術の進歩と新しい形の変化が起きるでしょう。社会における価値観の変化は、正に今、2020年から起きています。これまでの経済成長一本槍では立ち行かなくなると思います。2000年以上の歴史がある日本文化をどのように生かし、それを世界にどう広めていくのか、その文化価値の在り方を見直すことで、放送の価値観も変わってきます。これからの4～5年間は、メディアの在り方として、どのような提案が面白いのか一緒に議論しながら開発していきたいと思っています。新しい放送の概念が出来上がっていくことを夢に描いています。皆さんと一緒に未来を描いていきたいと思っています。

【挨拶】伊達 寛 代表取締役社長

「自らの領域を超え、放送の領域を超え、当社の新たな価値を創造する」

開局 25 周年おめでとうございます。

番組出演者の寺島実郎氏が「コロナにより、世界の政治経済含め、問題点があぶり出された」としばしば表現されますが、当社の問題点はコロナの 1 年前にあぶり出されており、コロナにより加速したと言うべきでしょう。ここが踏ん張り処です。

『ピンチをチャンスに！』

この言葉ほど、今の当社にふさわしい言葉はないと思います。

地上デジタル放送が完全移行した頃の原点に立って、且つ、放送・通信一体化の時代に、確固たるポジションを確立する為、まずは、体質を筋肉質にして、財務体質を強化し、それと共に、クリエイティブセクションとプロフィットセクションが一体となり、MXらしき、MXスタイルを創り上げたいと思います。

これまでの当社は、ただ地デジ化の恩恵にあずかっただけではありません。他局と差別化をはかり、他局のやらないことにチャレンジし、他局よりも一歩先を歩んで来ましたが、でも、まだまだだと思っています。さまざまな挑戦と失敗もありましたが、方向性は正しいと確信しています。後退はできません。社員が自ら提案し、自らの手で行うことが大事なのだと思っています。

『ピンチをチャンスに！』25周年の記念日をリスタートの日にしたいと思っています。できると確信しています。

日本では「イノベーション」と言えば「技術革新」を意味することが多いようですが、本来は「経済活動において、利益を生むための差を新たにつくる行為」を意味します。

やらないリスクの方が大きい時代です。変わらなければ勝てません。自らの領域を超え、放送の領域を超え、当社の新たな価値を創造していきましょう。

以上

本件に関するお問い合わせ
TOKYO MX 編成局 編成部